

小児白血病患児へのプレパレーションを 学習課題とした実習方法の評価

山口しおり¹・上野 美穂¹・山中 雅理¹・濱本 洋子¹
吉田恵理子¹・中尾 優子²・森藤香奈子³

要 旨 小児看護学実習の学習課題に骨髄移植を予定している患児へのプレパレーションを設定し、実習方法の工夫を行った。当該患児を担当した18名の学生を対象に自記式自由記載のアンケート調査を行い、9名から回答を得た。記述内容を質的に分析し、実習方法の評価と今後の実習方法について検討した。学生はプレパレーションの課題を通して、小児看護学の特徴に挙げられる要素を学ぶことができ、課題設定は効果的であると考えられた。一方、実習期間が短いことで情報分析や教材作成に要する時間の不足、教員や指導者によるアドバイスのタイミングの難しさが課題であった。今後も実習期間や学生のレディネスを考慮し、多様な実習課題を取り入れていきたい。

保健学研究 27 : 79-84, 2015

Key Words : 小児看護学実習, プレパレーション, 学習課題

(2014年7月31日受付)
(2014年10月13日受理)

I. はじめに

我が国は1994年こどもの権利条約に批准し、1999年には日本看護協会より「小児看護領域で特に留意すべき子どもの権利と看護行為」が示され、医療・看護の場面において、入院や治療が必要な子ども達の権利擁護に関し、様々な議論がなされてきた。2010年に日本小児看護学会が示した「日常的な臨床場面での倫理的課題に関する行動指針」では、“発達段階に合わせて子どもの思いを十分に聴く”，“子どもが理解し納得できるように説明する”という記述がある¹⁾。特に侵襲的な治療が定期的に行われ、入院が長期に及ぶ可能性が高い小児がんの子ども達にとって、病気と治療の必要性の理解と納得は、その後の治療と治癒を目指す気持ちに大きく影響する。患児と共に病気に向き合い、患児としっかりした信頼関係を作っていくために非常に重要な看護といえる。

一方、少子化の加速や入院の短期化により、今日、小児看護学実習における実践での学びが非常に困難になってきている。少子化によって小児病棟が混合病棟化、あるいは閉鎖となるケースも多く、1990年代より実習場の確保や入院の短期化によって実習期間内の継続した看護過程の展開が困難になってきていることが指摘されている²⁾。加えて、看護大学(学校)数は増加しており、小児看護学の実習場確保を困難にしている要因として挙げられる。継続した看護過程を展開できにくい環境は、小児との接触経験が希薄と言われる学生にとって、対象の

理解を十分得られないことが危惧される。そのため、短期間の実習で小児の発達の特徴を知り、子どもの人権を尊重するための具体的な行動を認識できるような実習の工夫が必要である。

今回、骨髄移植を予定している小児白血病の女児(当時10才)の母親より、「子どもにはきちんと理解したうえで移植に臨んでほしいが、どのように説明したらいいかわからない」との相談があった。母親の同意のもと、当該患児への骨髄移植にむけたプレパレーションを小児看護学実習における学習課題に設定することとした。小児病棟実習の期間は1週間であり、当該患児に必要な学習と学生の実習目標の双方を達成させるために、担当教員と検討を重ね、実習方法の検討を行い、サマリーの活用と学生2名で受け持つ方法で実習を展開した。今回の取り組みについて、学生の学習効果の側面から分析を行ったので報告する。

II. 研究目的

小児看護学実習の学習課題にプレパレーションを設定する上で行った実習方法を評価する。

III. 研究方法

1) 調査期間

2012年3月～4月

1 長崎大学病院

2 鹿児島大学大学院保健学研究科

3 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻

2) 調査対象

20XX年度小児看護学実習にて当該児を受け持ったA大学の3年次生18名である。

なお、対象者は患児の希望で全員女子学生である。

3) 調査方法

プレパレーションを実施した感想、スタッフや教員の関わり方について自由記載によるアンケートを実施した。アンケートの内容は、①実習の方法に関して：オリエンテーションのあり方、ペアを作って実習したことに関する意見、情報提供、実習課題について、②プレパレーションの準備や実際に関して：患児や母親への配慮、学習課題の設定、指導者や教員のアドバイスに関して、③その他の意見とした。

4) 用語の定義

プレパレーションは一般的に心理的準備とされ、その目的は、子どもに①正しい知識を提供すること、②情緒表現の機会を与えること、③心理的準備を通して医療者と信頼関係を築くことである³⁾。

本研究のプレパレーションは、当該児の骨髄移植目的の転院に向け、学生が計画立案した学習内容とそのための情報収集と分析および学習後の患児や母親の反応とする。本来は学習後や骨髄移植後の反応に関する患児や家族の評価を行うべきであるが、今回は、プレパレーションの内容の評価ではなく、実習方法の評価であるため、患児や母親の反応は学生が捉えた内容とする。

5) データの分析方法

データの分析は以下の手順で行った。分析の客観性を担保するため、質的研究に精通した研究者と共に分析を行い、実習を直接担当しない共同研究者に確認してもらった。

- ①研究者間で記述データを繰り返し読み合わせし、実習方法や学習した内容に着目して文節毎に意味分析した。
- ②①のデータを読み合わせし、学生の情意的側面に着目し<キーワード>を抽出し、分類した。
- ③②で分類されたデータを類似する内容で分類し、“サブカテゴリー”とした。
- ④類似する“サブカテゴリー”をまとめ『カテゴリー』として名称をつけた。
- ⑤抽出された『カテゴリー』と実習目標と照らし合わせて、今回の実習方法について評価した。

6) 倫理的配慮

研究目的、無記名および自由意思による参加であること、参加・不参加による不利益は被らないことを文書および口頭で説明した。アンケート記入後、学内便

ポストに参加者自身で投函してもらい、提出をもって研究への同意とみなした。なお、成績への影響に対する不安を考慮し、成績判定が終わった時期に調査を行った。本研究は長崎大学病院看護部倫理委員会の承認を得て行った。

7) 小児看護学実習について

A大学3年次開講科目である小児看護学実習は2単位(実習期間2週間)のうち、小児病棟での実習は1単位(1週間)、1グループあたりの人数は5～6名である。基本的に学生1名が1名の患児を受け持ち、病状や治療に合わせた看護過程の展開を行う。

A大学の病棟実習の学習目標は以下の通りである。

- ① 入院中の小児とその家族とのコミュニケーションのとりかたを学ぶ。
- ② 入院中の小児の健康状態、治療過程を把握する。
- ③ 入院中の小児を成長・発達の視点からとらえる。
- ④ 入院中の小児とその家族について、入院(発症)にともなう家族状況の変化を知る。
- ⑤ 入院中の小児と家族とのかかわりを通して、子どもの権利擁護について考える。
- ⑥ ①～⑤をもとに適切な看護援助方法を学ぶ。

A大学の实習では、血液疾患や小児がんなど、長期間の治療を要する患児の入院が多いことが特徴で、1名の患児を学生が継続して担当することが多い。短期間の実習で学習効果を高めるために看護サマリーを活用し、実習最終日にグループへの報告と次のグループへの受け持ち学生への情報提供に使用している。

8) 今回の実習方法について

当該児は、当院で化学療法を受けながら、転院して骨髄移植を受ける。従来通り学生1人で患児を受け持つ方法で、実習期間内に施行される治療に必要な看護過程を展開することと今後の予定されている骨髄移植の学習を進めていくという2つの学習課題を同時に進めていくことは負担が大きいと考えられた。どちらも学習到達を目指すために教員と検討を重ね、当該児の担当学生は2名のペアで受け持つこと、サマリーを活用し当該児と学習した内容と次週の学習課題について引き継ぐこと、担当学生は協力しながら、具体的学習方法と内容の検討および担当週の治療や体調をふまえた看護過程を展開し、それぞれにサマリーを作成する方法をとった。なお、受け持ち学生は患児の希望により全員女子学生とした。

学生が選んだ当該児に対する学習内容および方法について表1、学生が作成した教材を図1、図2に示す。

表1. 学生が選んだ学習内容および方法

受け持ち週	学習内容 (方法)
第1週	情報収集と学習課題の設定
第2週	血液って何だろう (絵本とキャラクターの設定)
第3週	血液工場を見て見よう (絵本)
第4週	治療について知ろう (絵本)
第5週	げんきに過ごすためのルール (同室者と協働: 紙芝居と手洗い実習)
第6週	手洗い指導 (チェックシートを患児と共に作成)
第7週	骨髄移植ってなあに? (絵本)
第8週	骨髄をもらうためのルール (絵本)
第9週	骨髄移植ってどうやるの? (絵本)
第10週	転院先での過ごし方 (絵本)

表2. <学生の学び>カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
『患児が理解できる内容の分析』	・病気の理解度の把握 ・伝える内容の精選 ・言語理解の把握
『小児看護における母親の役割』	・母親も一緒に参加する ・母親から得られる情報の大切さ
『患児が関心を持って参加するための工夫』	・説明時の環境を整える ・好みの理解
『継続看護への意識』	・次のグループへの情報提供のあり方 ・ディスカッションの大切さ

表3. <実習の達成感>カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
『グループ学習がうまくいっていると感じる』	・ペアの連携がうまくいく ・グループの協力が得られる ・計画に関心を示してもらえる
『患児との関係が良好だと感じる』	・母親の好意的な反応 ・患児の好意的な反応
『事前学習が生かせたと実感する』	・患児の具体的なイメージがもてる ・サマリーを活用した事前学習

表4. <実習の困難感>カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
『時間的な制約』	・指導のタイミングが合わない ・ペアと時間を合わせる難しさ
『情報不足』	・サマリーと受け持ち週の患児の状態に感じる差違 ・患児の好みや反応の情報がない



図1. 学生が作成した学習教材

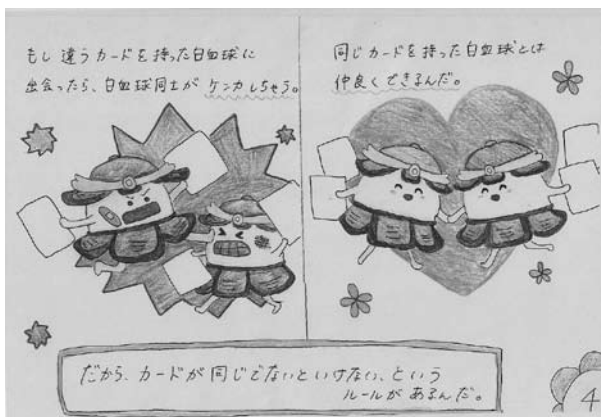


図2. 学生が作成した学習教材の一部

IV. 結果

アンケートは9名より回収された。研究者間で記述内容をくり返し読み合わせし、<学生の学び>、<実習の達成感>、<実習の困難感>のキーワードを抽出した。<学生の学び>では『患児が理解できる内容の分析』、『小児看護における母親の役割』、『患児が関心を持って参加するための工夫』、『継続への意識』の4カテゴリー(表2)、<実習の達成感>では『グループ学習がうまくいったと感じる』、『患児との関係が良好だと感じる』、

『事前学習が生かせたと感じる』の3カテゴリーが抽出できた(表3)。<実習の困難感>では、“指導のタイミング”や“ペアと時間を合わせる難しさ”などの『時間的な制約』、『情報不足』の2カテゴリーが抽出された(表4)。

以下、<キーワード>、『カテゴリー』，“サブカテゴリー”で記載する。

1. <学生の学び>について

『患児が理解できる内容の分析』では、プレパレーションを患児が理解できる内容にするために“伝える内容の精選”に多くの時間を使い、最も難しかったという記載が多かった。『小児看護における母親の役割』は、説明の途中に母親が患児に対して「何だろうね?」「わかったかな?」など問いかけてくれたことで患児の理解度を確認できたこと、患児の発達・体調に関して母親から情報を得ることで、患児が説明に集中できる環境が作れたなど、母親の協力が小児看護にとって重要な要素であることを学んでいた。

また『患児が関心を持って参加するための工夫』では、“患児の好みを理解”、体調の考慮やスケジュールの

調整など“説明時の環境を整える”ことが挙げられた。

また、『継続看護への意識』では一週目に作ったキャラクターが最後まで継続されていたことの喜びや、絵本の改善点や次のテーマへの流れなどをサマリーに書き足りなかったなどの記載が含まれていた。

2. <実習の達成感>について

『グループ学習がうまくいったと感じる』ではペアの連携やグループメンバーから計画に関心を示してもらえ等々の要因が挙げられた。『患児との関係が良好だと感じる』は、サマリーや口頭の引き継ぎで、患児の希望するキャラクターや学習内容を取り入れたことを患児や母親が喜んでくれた、学習内容に理解を示す反応を実感できたと記載していた。『事前学習が生かされたと感じる』では、サマリーの活用で患児の具体的なイメージが持て、事前学習のポイントが分かり、実習に活用できたと述べていた。

3. <実習の困難感>について

『時間的な制約』は、教員や指導者からの指導のタイミングと実際に患児に説明を行うまでの時間が短いことや、ペアと時間を作ることが難しかったという内容を含んだ。『情報不足』は、患児の好みや説明後の反応など詳細なサマリーを求める内容や情報と現状の差違についての記載を分類した。

V. 考察

今回の取り組みは、学生の実習に対して患児や母親の理解が高く、学生が実習において小児看護の特徴を学ぶ貴重な機会となった。小児看護学の特徴は、身体的・知的・心理社会的機能の発達によって疾病に対する反応が異なる子どもに対して、成長・発達の視点から子どもを全体的に捉えた支援が必要なことである⁴⁾。また、子どもにとって重要な存在である家族とともに治療や健康管理・養育を検討し、実践することにより、子どもの成長・発達が促進され、さらに家族の満足度を高めていくことができることである³⁾。<学生の学び>4カテゴリーのうち、『小児看護における母親の役割』、『患児が理解できる内容の分析』、『患児が関心を持って参加するための工夫』はこれらの内容を含んでおり、小児看護学の課題として今回の取り組みは効果的であった。

『患児が理解できる内容の分析』は、プレパレーションのステップ⁵⁾によると、第1段階：子どもと子どもを取りまく状況のアセスメントに該当する。プレパレーションは、子どもが経験すると思われる感覚に力点を置くことが重要である⁶⁾。学生にとっても未体験の治療に関して、患児が今後経験する感覚を想像しながら学習内容を精選することは、対象の理解を深める学習だけでなく、学生にとっても病気や治療に関する知識を深める学習であったと考えられる。

また、サマリーの作成において次グループへの情報提供のあり方や情報の共有、継続への意識を高めることが

できており、サマリーの活用は有効であったと考える。一方で、実習前に受け取ったサマリーの情報を分析することが難しく、サマリーが大事だということは理解できても、実際に自分が記載したサマリーが次週以降の学生に役に立ったのかという不安だという記載も含まれていた。薬師神ら⁷⁾が分析した、継続受け持ち実習の学習プロセスへの影響要因7項目のうち、情報分析に関連する要因に「情報量と情報の範囲の調節」と「情報内容の活用」がある。短期間の実習の中では学生がサマリーの情報を整理することが難しかったと考えられ、今後の実習指導における重要な課題である。さらに<実習の困難感>では、サマリーの情報に依存する傾向も見られ、学生と患児や母親との関係性の中から情報を得ることの大切さについて、伝えていく必要が示唆された。

大森⁸⁾は事前学習を活用できること、患児の個性を考慮できたこと、教員や指導者の指導が具体的であったこと、教員や指導者から患児との関係を良好にするサポートがあったことなどの要因が、小児看護学実習において学生の満足感に影響すると報告している。<実習の達成感>のカテゴリーでも、『事前学習が生かされたと感じる』ではサマリーを活用したことで、事前学習のポイントが絞れたり、患児の具体的なイメージが持てたという内容が含まれていた。大森の調査⁹⁾では、母親との関係性についての調査がされていないが、本研究では、母親のサポート的な関わりが患児の理解に影響していたと考える。

また、学生が選択した絵本教材作成がグループ内のコミュニケーションツールとして機能し、さらにグループの協力で発展できたと考えられる。

今回のプレパレーションの取り組みでは、学生の実習に対して患児や母親の理解が高く、学生が実習において小児看護の特徴を学ぶ貴重な取り組みとなった。プレパレーションには、患児への説明だけでなく、感情表出を促すこと、ディストラクション、適切性の評価とその後のフォローも含まれる⁴⁾。今回は学生への学習効果についてのみの評価であり、患児や母親の捉え方、骨髄移植の場面でどのような効果があったのかについては評価できず、学生へのフィードバックもできなかった。合わせて、学生が選択した学習課題(表1)のなかで、グループ5およびグループ6は、患児が自分よりも年齢の低い同室の児への学生の関わりをうらやましく思い、病気の勉強だけでなく楽しいことがしたいという気持ちをくんで計画された内容であった。このことは、磯部ら⁸⁾も同様の報告がされているが、<実習の達成感>の記載としては含まれていたが、ディストラクションであると捉えることができていなかった。患児の経過を全体的に捉えるサポートと合わせて理論と結びつける指導が今後の課題である。

一方、学生は教材作成などわかりやすい課題が実習に含まれると、小児看護学実習で学ぶべき対象理解に目が

向けられなくなる側面もある。短期間の実習であることや学生のレディネスを考慮しながら、学習課題が達成できるように柔軟な対応が必要である。

VI. まとめ

学生はプレパレーションの課題を通して、小児看護学の特徴に挙げられる要素を学ぶことができ、課題設定は効果的であると考えられた。今回の取り組みは担当学生だけでなく、プレパレーションの学習課題を通してグループ全体の学びにもつながった。今後も患児や家族の協力を得ながら、多様な実習の取り組みをしていきたい。

引用文献

- 1) 日本小児看護学会編：小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針，2010：2-3.
- 2) 吉武香代子：平成5・6・7年度文部科学省科学研究費補助金成果報告書「看護基礎教育の中の小児看護学教育内容・方法に関する総合的研究」，1989：48-61.
- 3) 植木野裕美：プレパレーションの概念．小児看護，29 (5)：542-547，2006.

- 4) 奈良間美穂，丸光恵：第1章小児看護の特徴と理念．系統看護学講座専門分野Ⅱ小児看護学概論小児臨床看護総論，奈良間美穂編，医学書院，東京，2011：4-8.
- 5) 田代弘子：プレパレーション実施のポイント．病気の子どもへのプレパレーション，及川郁子，田代弘子編，中央法規，東京，2007：10-17.
- 6) 田中恭子：プレパレーションのガイドラインと年齢別アプローチ法．プレパレーションガイドブック，田中恭子編，日総研，愛知，2006：66-73.
- 7) 薬師神裕子，永松有紀，中村慶子：同じ患児を継続して受持つ学生の学習プロセスの構造—実習の教育効果と実習指導方法の検討—．日本小児看護学会誌，13 (2)：1-8，2004.
- 8) 大森裕子：小児看護学実習における学生の満足感に及ぼす要因．大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要，8：73-77，2002.
- 9) 磯部尚美，柴邦代：小児看護学実習におけるプリパレーションからの学生の学び．愛知きわみ看護短期大学紀要，4：117-126，2008.

Evaluation of a method for setting students learning tasks in nursing practice with children to help them prepare patients with leukemia for bone marrow transplants

Shiori YAMAGUCHI¹, Miho UENO², Mari YAMANAKA², Yoko HAMAMOTO²
Eriko YOSHIDA², Yuko NAKAO³, Kanako MORIFUJI⁴

- 1 Nagasaki University Hospital
- 2 Kagoshima University Graduate School of Health Sciences
- 3 Graduate School of Biomedical Sciences, Nagasaki University

Received 31 July 2014

Accepted 13 October 2014

Abstract We developed a method for setting students learning tasks in nursing practice with children to help them prepare patients with leukemia for bone marrow transplants.

Self-reported questionnaires on experiences were distributed to 18 students who had been assigned to such patients during nursing practice; nine were completed and returned. Descriptive data analysis was performed in order to evaluate the effectiveness of the method we had conceptualized.

The results revealed that students learned the essentials of nursing care for children, indicating that the task set for the students was effective in helping them prepare young patients for bone marrow transplants. Nevertheless, nursing students reported having insufficient time to perform assessments or prepare teaching materials for patients. It was also difficult for teaching staff to give students adequate suggestions due to the limited duration of nursing practice. Thus, there is the need to consider both the brevity of and students' readiness for nursing practice when setting learning tasks for them.

Health Science Research 27 : 79-84, 2015

Key words : Nursing practice for children, Preparation, Learning task